

話している記事を見て、この度『平和の礎』にと話を進めた。

(北海道 五十嵐 甚吉)

手記

北海道 坂本政年

一

①大正十(一九二一)年十月一日生まれ 函館市入舟町

昭和九(一九三四)年三月二十三日 市立幸尋常小学校卒業

同十一年三月二十三日 市立弥生尋常高等小学校高等科卒業

②祖母、父母、兄弟姉妹の九人家族

家業 鮮魚小売商

昭和十二年二月十九日 父死亡 四十六歳

自分が十五歳で家業を継ぐ。兄は足悪く入院の

日々であった。

二

①昭和十七年一月十日、在満要員として旭川北部第二部隊連隊砲中隊に現役として入隊。

②同十七年三月、東安省西東安滿州第八十八部隊に配属。

同十八年、初年兵教育係として勤務した。

同十八年八月、過労のため病に倒れ、西東安陸軍病院に入院。

牡丹江陸軍病院、南滿の興城陸軍病院に転院。

療養中、八十八部隊は南方並びに北支に転属。十九年秋に西東安病院に戻ってきたときは八十八部隊兵舎は空き家でした。

勤務部隊の命令あるまで西東安病院にて待機。

二十年一月、新設部隊に編入され、開拓農民召集兵、朝鮮人召集兵の初年兵係として教育任務につく。

二十年、師団命令にて第一線主力を南に下げ、東京城山中にて陣地構築作業。

三

①ソ連部隊、二十年八月九日、ソ満国境越え、一斉攻撃で戦闘始まり、八十八部隊も師団から、東京城山中の本隊と合流せよの命下り、三日三晩不眠の行軍で本隊と合流、待機する。

②戦闘せず命令を待つて待機するのみ。

日ソ開戦のとき、防毒面・鉄カブトは二人に一個、連隊砲の砲弾は一門につき八個より与えられなかった。

四

①八月十六日頃、終戦成るを兵ら皆知る。

師団本部の指令待つより打つ手なし。

兵は勝手な行動許されず、命令に従うのみ。

師団本部よりの命令待つのみ。

②武装解除の命あり。兵器を中隊ごとにまとめる。

ソ軍監視付きで牡丹江掖河兵舎に集合させらる。

③自由行動ならず。

④敗戦は日本にとって初めての経験。将官といえども全て不明。師団司令部の指図待つのみ。

⑤部隊行動なので他よりの被害なし。

一般の日本地方人、また開拓農民は目の当てられぬほど苦労した。

五

①東京ダモイと騙され、貨車が入るたび千人単位で貨車に乗せられ、一人でも逃亡あらば全員東京ダモイならず、シベリア送りと警告さる。食料も満足に与えられず、貨車が停車するたび一般地方民並びに子供達が集まって来て物々交換を求め、盗まれることも再三あった。

子供らに汽車の進行方向を聞くと「ダモイ東京、ダモイ東京」としか教えてくれなかった。

②バイカル湖を見たとき「海が見えた、ウラジオに着いた」と皆一斉にバンザイをした。

その場所に十時間以上も止まっているので、日本の船が来るのを待っているのだと大きな期待があった。

③ やがて貨車が発車。気がつくとも進行方向は西へ

西へと向かつて行く。不審の念がだんだん強くなる。

二週間以上もかかって着いた所はタイセットであつた。九月下旬頃と思う。

収容された所は幕舎であり、電気・暖房設備なく、二年間、酷寒身に凍みる毎日であつた。

六

① ノルマ優秀な者は日本に帰れるのだと、年に数回、二、三十人単位で引き抜き、別な収容所に送られる。

行き先は誰にも分からず、日本に帰ったとばかり信じていた。

早く日本に帰りたいので労働に励む。

ノルマは上がるばかりである。

② 入浴は冬ばかりで、石を焼いて水をかけ蒸し風呂である。入浴している短時間に脱いだ衣服は熱気消毒され、それで終わりであつた。

③ 私達の収容所は千人単位であつた。

七

① 高い所は崩し低い所は埋め道路を造り、密林の伐採（指定された長さに切り）、トラックの入れる場所まで運ぶ。木の太いのは一メートル近いものもある。

貨車の砂利下ろし作業、収容所の成績を上げるため、昼間は伐採トラックの積み込みで、砂利下ろし作業はいつも夜中であつた。

② 八時間労働が条約の規定にあるらしいが、国境警備師団に所属している部隊なので作業もきつく、頑張るほどにノルマは上げられる。

ノルマを達成できない場合、できるまで時間に閑係なく時折労働を強要された。

③ 捕虜生活一年半過ぎ頃より、病人に対しては軽労働に回すようになった。

ノルマを達成するとハラシヨラポータとして黒パンの増配があつた。百グラム位の増配である。

④ 貨車の丸太の積み下ろし、砂利の積み下ろし

は、監視兵の指図通り初めのうちは従って動いたが、だんだん馴れるに従い、貨車の長さにより兵の割当が分かってきたので、現役兵同士グループを組み、積み下ろし作業をした。

⑤老兵達は年が老いても作業ノルマが同じなので、次々と斃れて不帰の兵となり凍土で眠っている。

同じ日本人同士がと一般の人々は考えるかもしれないが、この苦しさはシベリア捕虜の経験者でなければ分かり得ないことである。

八

①いかなる労役でも我ら捕虜には自由にならず、選択は許されない。

②体重が余りにも減り、痩せ過ぎると軽労働に回されることもある。

③労役に堪えられないほどに体力のなくなった者は初めて休養を与えられる。

④健康管理は睡眠以外に方法なし。体に大した害がなければ何でも口に入れた。

⑤朝夕の点呼、作業や往復の監視は非常に厳しかった。

二十二年頃より厳しさも幾分緩みつつあった。

⑥朝食時に昼食の黒パンが同時に出るので、スープと共に朝食のとき一緒に食べる。腹が空くので労働に耐えられずやむを得ないことである。

スープは、腐った野菜の一つか二つ浮かんだスープである。

作業に出て蛙・鼠・野草・茸・虫、食べられるものは何でも食べた。体力を保つため、全員がやった。

⑦二十一年秋頃より日曜が休養日となる。

⑧土曜日の作業後か日曜日の午前中、持ち物を全部並べて私物検査があり、武器らしきものを持つていないか検査する。

針一本でも武器と見なし取り上げる。

時計、万年筆などは奴らの私物として取り上げてしまう。

九

①初めての収容所暮舎生活で、採光、暖房設備等全くなく、作業の帰り、木片（焚き火用）や白樺の皮を剥いで来てランプ代わりに灯した。起床、作業集合は、レールを吊るして鐘代わりに叩く。

②昭和二十二年春頃、洗脳教育を受けた者が各収容所に配され、洗脳教育に発行された「日本新聞」を読み聞かされ、上の空で聞いていた。

兵隊の帰国を日本国民は誰も歓迎していないと叩き込まれた。

③洗脳された者が各収容所に配置され指導の権利を振り回し、かえって悪い結果が多かった。

④経験はないが、明かりのない営倉に入れられ、食料も一日朝一回きりであった。三日から一週間位入牢となる。

洗脳教育者に文句を言って反対意思の表現が再三にわたると、重労働の収容所に回される。

十

①タイセット地区の収容所を「ラボータ優秀」と

言われては二十人から三十人単位で引き抜き、日本に帰れるのだと汽車に乗せられ、別な収容所に回される。

帰国するまで五回位、収容所は転々と変わった。

帰国しても下士官以上の者はソ連で他国と戦争のあった場合、ソ連は捕虜に対して召集権があるのでと言われた。

ナホトカに着いて、これで日本に帰れるのだと気持ちが悪分楽になった。

ナホトカに着くまで、途中で捕虜を集合させ乗せたことを覚えている。

②ナホトカに着いても収容所が満杯になっていると他の作業収容所に回され、またいつ帰れるか当てのない重労働に服さなければならぬ。

ナホトカの帰国収容所を四カ所回って初めて帰国が決まる。

ナホトカの収容所の満杯は、日本が捕虜の帰国を望んでいないので日本の船が来ないので教

育される。

③ 船に乗って岸壁を離れるまでは安心できなかった。

④ 洗脳教育者には、帰国途中の日本海で船から海に投げられた者もいた。その人の命はそれで終わりであった。

洗脳教育者は人が変わったようになしなくなった。

⑤ 昭和二十三年五月中旬、舞鶴上陸。

十一

① 食料、衣料、その他の生活用品が全て配給制度の生活に変わり、品不足で敗戦国の惨めさを感じみ知らされた。

② 勤勉なる日本国民は、苦難に臆せず互いに助け合い、かつて経験せざる敗戦国日本を、僅か五十余年で経済大国に築き上げたということは誇りとして良いと思う。

その後の生活は順調でなかったが、三年の捕虜生活、食料不足、着の身着のままの重労働生活

に比べると、家族あつての苦勞で、苦勞の内に入らない。

【執筆者の紹介】

住 所 函館市谷地頭町 弁当仕出業

出生地 大正十年十月一日、函館市入舟町にて、

父 文三の次男として出生。

祖母、父母、兄弟姉妹、九人家族

当時、父は鮮魚小売商経営

学 歴 昭和九年三月 函館市立幸小学校卒業

同十一年三月 市立弥生尋常高等小学校

高等科卒業

兵 役 昭和十七年一月十日、在満要員として旭

川北部第二部隊連隊砲中隊に現役入隊。

同年三月、満州東安省西東安駐屯満州第

八十八部隊に編入。翌十八年、初年兵教

育係として勤務。同年八月、過勞のため

西東安陸軍病院に病氣入院。続いて牡丹

江陸軍病院、南満興城陸軍病院と転院療

養。

昭和二十年一月 新設部隊に編入。現地召集の開拓団召集兵、朝鮮人召集兵の教育係上等兵として勤務す。

昭和二十年四月、師団命令にて満州防衛主力を南に移動した後、陣地構築作業に勤務。

同年八月九日、ソ軍は国境突破、攻撃進入す。

第八十八部隊は師団命令にて東京城山中の本隊に合流。連隊砲の砲弾は一門につき八個しか与えられず。

山中に待機中八月十六日、終戦を知らされる。

武装解除の命令が下達され、兵器を中隊ごとにまとめ、ソ連軍の監視付きのうちに牡丹江掖河の兵舎に集結。

ソ連軍の接収管理下に抑留され、九月下旬、シベリア・タイセット収容所に収容

される。集成作業大隊名忘却。大隊長名忘却。

昭和二十三年五月中旬、舞鶴復員。引揚船名忘却。

後、家業である鮮魚販売業（通称魚屋）を営み続け、数年前より学校給食を引き受け、弁当仕出店として営業を続けている。

（北海道 渡邊 建一）

シベリア抑留記

北海道 菊池 普薫

一、出生から入隊

大正十二（一九二三）年一月二十八日生まれ。

北海道松山郡厚沢部町木間内、遠成寺（東本願寺所属）の農村地帯における小部落である。

京都大谷中学校（五カ年）を卒業する（昭和十六（一九四一）年三月）。約二カ年間、僧侶とし